

教員養成課程における新聞活用

～大学における NIE 活動の可能性～

関西国際大学 教育学部
教育福祉学科こども学専攻
准教授 中西 一彦

1. はじめに

大学の教員養成課程における新聞活用はいかにあるべきかという問題意識をもって新聞を活用した言語活動に取り組んだ。教員養成課程の学生が、教材開発を行い、また学習指導要領に記された新聞活用との関連を考えて、言語活動の充実を図っていく。さらに、学生が評価の観点を持ち模擬実践する。こうした大学の教員養成課程における NIE 活動を報告する。

2. 実践例 I 「今日の新聞から学級通信」

(大学1年「国語 I」における授業実践)

■「今日の新聞から学級通信」のねらい

こどもたちが実際に読むものという前提を設けることによって、学生たちはこどもたちの姿を頭に描く。ただの手紙ではない。教師ならばと自らの立場を移して、こどもたちの様子をもう一度想像してみたなら、そこに「学級通信」の果たす役割が浮かんでこよう。まさに授業者視点が求められる。

「今朝の新聞から」というテーマによるスピーチ実践はある。「国語 I」においては、授業時に「新聞タイム」と称して、黙読したり、記事をピックアップしたりと、変化を持たせている。今年度は新しい試みとして、「国語 II」の受講生である大学2年に「新聞活用」授業を準備させた。それに対し、「国語 I」受講生である大学1年が児童・生徒役となって、大学2年による授業を受けることとなった。教員養成課程に入学した大学1年が、学

校や学級というものをどのようにとらえているのかを模擬実践を行う前に把握することをねらいとした取り組みである。

教師や集団をどうとらえているかが、そのままこども役の視線として現れるであろうという仮定に基づくものである。小学校担任になったつもりで、学級通信を作らせてみた。単なる連絡だけで終わらないように、自己のメッセージをわかりやすく伝える力を身につけさせる新聞活用学習活動である。

■「今日の新聞から学級通信」の指導過程

- ①当日の新聞(2012年11月6日付朝日新聞朝刊)記事から「気になった記事」を選び、学級通信を作成するという課題を提示する。
- ②大きさはB4サイズ1枚とし、対象学年は特に指定せず、自ら設定することとする。
- ③こどもたちに読ませるものという意識を持って、文字は丁寧に、できるだけ濃くはつきりと書くようにする。
- ④見出しについては、自ら新たにつけてもよいし、記事のままでもよいこととする。
- ⑤どうすれば自己のメッセージがわかりやすく伝わるかを「こどもたちが読むもの」という観点をもって、内容・形式ともに工夫を施すこと。

■学級通信をこどもたちに読ませるヒント (学生たちの話し合いより)

- ①メッセージが伝わる。
- ②クイズ形式にする。

- ③問いかけで引きつける。
- ④要点を提示する。
- ⑤身近な話題である。
- ⑥興味関心を確かめる。
- ⑦問題提起がある。

作品 1



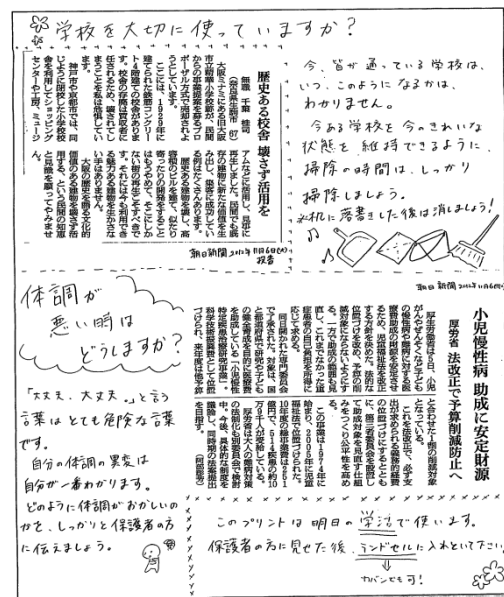
作品 1 分析 「忘れてはいけない東日本大震災」の大見出しに、この記事を通して考えてほしいとの担任として教師としてのメッセージが印象的に伝わってくる。

■作成者（大学1年）感想

- こどもの目線を見て、伝えるのは簡単なことではなかった。
- こどもから保護者に伝わる通信を作る作業であり、教師の大変さを痛感した。
- 大学入学後はじめて、教師っぽいことを体験できたのでよかった。
- 自分が考えたことを小学生に伝えるのは難しいが、率直にもっとやさしく、そして詳しく伝えられるような文章を書こう。

- こどもたちにわかりやすく伝えるためには、まず自分がきちんと理解し、その物事についての応用的な解釈も持ち合わせていなければならないということがわかった。
- 先生になったつもりで記事を選び、学級通信を書くのが新鮮だった。
- 本当に先生になったつもりで取り組みたい。練りに練ったよい通信にしたい。

作品 2



作品 2 分析 「校舎を壊さずに活用」から「学校を大切に」へ、そして「しっかり清掃」とこどもの身近なところへおろしている。連絡事項も日常的である。

■筆者（中西）によるまとめ

先生になったつもりで学級通信を作成するという作業は、意欲の喚起や動機付けとして効果的である。対象もこどもたちとはつきりしている。ただし、直接こどもたちが目の前にいるわけではない。実の場ではない点に課題が残る。だが、わかりやすく伝えることを

意識することによって、言葉を選んだり、表現を工夫したりする言語活動が生まれる。新聞記事を選ぶという過程を入れることにより、特にメッセージ性が強くなったのは明らかである。

3. 実践例2「コラム要約四字熟語」

(大学1年対象 「国語I」における大学2年による模擬実践)

■「コラム要約四字熟語」—大学1年対象授業者としての大学2年生のねらい

新聞掲載のコラムを読み、内容要約として漢字一字で表現する。この漢字一字を通して、相互交流し影響を与え合いながら、創作四字熟語へと高めていく取り組みである。

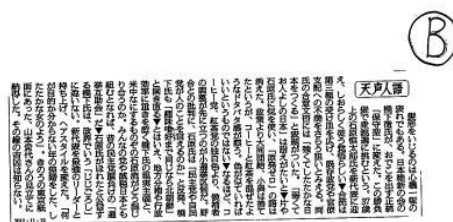
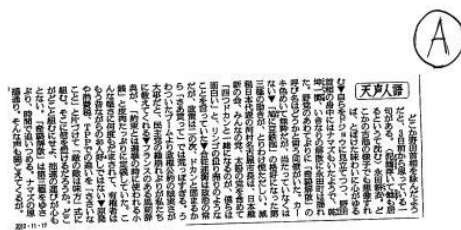
「総選挙」についてのコラムを3つ取り上げ読み比べることによって。各コラムの観点を明確化する力を高める。次に、1つのコラムを選択し、内容を要約し漢字一字を用いて表現する力を鍛える。最後に、意見交流を重ね、コラムの内容に添う四字熟語を創作する力を身につけさせるという新聞活用学習活動をねらった。

■「コラム要約四字熟語」大学2年生が考案した指導過程 (授業対象は大学1年8人)

資料 天声人語 (朝日新聞)

- ① A (2012年11月17日付)、B (同年11月19日付)、C (同年11月22日付) のコラム (天声人語) を配布し、一読する。
- ② 今回の対象は大学1年 (8人) であり、4人ずつ2グループに分ける。
- ③ A、B、Cのコラムのうちからグループ内の話し合いによって1つ選択する。
- ④ それぞれにコラムを各自改めて読み、内容を要約し漢字一字を用いて表現する。
- ⑤ グループ内において漢字一字を紹介し合い、組み合わせについて意見交換し四字熟語を創作する。

- ⑥ 2グループから双方の四字熟語について根拠をあげて披露し合う。



■創作四字熟語紹介

「混色汚変」 (こんしょくおへん)

混ざり過ぎると、良い結果は生まれない、という意味を表す。絵の具の場合、いろんな色を混ぜると最後は黒に近づく。同様にいろんな党が混ざっても汚くなり、良い結果は生まれないのではないかという思いをこの創作四字熟語に込めた。

「心混変縁」 (しんこんへんえん)

橋下氏と石原氏が一緒になって党を創り上げたが、どのように混じり合うのか。また、結ばれた縁によって今後どう変化していくのかという思い (興味、関心) から、この四字熟語を考案した。期待と不安が入り混じった思い、といった意味を込めて使うことになると思われる。

■相互評価

●「混色汚変」に対する「心混変縁」班からのメッセージ

絵の具を混ぜ合わせた場合という発想が面白いし、言われてみれば確かにそうだなと思える。「混」と「変」の二文字が私たちの班と共通しているが、私たちが真ん中（2つめ、3つめ）に配したのに対し、1つめと4つめに配しているのも「対照的だな」と思った。真ん中の2文字をひっくり返すと「おしょく」となり、「汚職」をイメージさせるのは深読みだろうか。

●「心混変縁」に対する「混色汚変」班からのメッセージ

「ん」で終わる漢字を4つ並べてリズムを生み出しているのは、「なかなかやるな」という感じです。新たに結ばれたということから「心混」は「新婚をかけているのかな」とも思うが、そうだとすれば、「うまいな」と言わざるを得ない。

■授業者（大学2年生）による評価

●どちらの班も、作品としてはよく出来ている。「混色汚変」の方は音の響きからも、今の日本の政情の不安定さや混沌とした様子が伝わってくる。また話し合いにおいても、各自がきちんと意見を主張していたので、これもA評価としたい。「心混変縁」の方は、相互評価にもあるように、「ん」の繰り返しが見事であると感心した。使用法にも触れており、文句なしのA評価である。ただ話し合いにおいては、進行役がかなり苦勞して進めていたので、ここはB評価である。個人活動の段階においては、結果としてはA評価が半分、B評価が半分である。最初は漢字一字を思い浮かべて、それでよしとしていた人もいたが、グループにおける話し合いの時に、なぜその漢字か

説明できるようにと指示してから、改めて内容を確認するという姿勢になった。

■今回の模擬実践を通して授業者である大学2年生自身が考えたこと・気づいたこと

●授業時の様子・状況から考えたこと・気づいたこと

Bのコラムを選んだ理由として、他のA、Cに比べると読みやすかったという意見や、橋下さんや石原さんに興味を持っていたという意見が多かった。このことから、興味や関心を持っていると進んで記事を選ぶことができるのだということに気づいた。いろいろな新聞記事を読み、興味を持つ記事を見つけることが大切だと思った。

■筆者（中西）によるまとめ

授業者（大学2年生）の評価観点項目が「意味、用法まで」や「語呂の良さ」「リーダーシップを發揮し」など明確なところに長所があった。したがって、グループにおける話し合いの時に、「なぜその漢字か説明できるように」と具体的に指示することが可能になった。指導と評価の一体化を図る力が、評価の観点項目を作成することによって具現化したことを示唆するものである。

4. おわりに

ここでは紙幅の関係上2つの実践例を示すのみとなった。実際には、10を超える実践例を持つことができた。形式としては実践報告という点に重きをおいたものとなっている。「言語活動の充実」にいかに関与しているのか、どのような成果が見えたのかについては、別の機会を持ちたい。

ここで言えることは、新聞の紙面を開いて繰って読むという受身的な活用では言語活動にはならない。やはり、新聞を学習材化するという能動的な読み、能動的な活用が必須であることは明確に言うことができる。